

「I氏賞」のこと

守安 収

去る11月17日、当館では岡山県新進美術家育成「I氏賞」10周年記念行事が開催されました。「I氏賞」の「I氏」とは岡山県出身の伊藤謙介氏のこと。氏は京セラ創業メンバーで会長職を務めた経済人ですが、とても誠実で謙虚、かつ豊かな感受性の持ち主です。伊藤氏が寄付された私財を原資に県は基金を立ち上げ、岡山県ゆかりの新進美術家(40歳以下)の育成に取り組み始めました。これまでに大賞10名、奨励賞20名の受賞者を輩出し、彼らが国内外で活躍する姿を目にすることが多くなりました。私どもでの「受賞作家展」も7回を数え、12月10日に無事閉幕いたしました。▼私は当初、県ゆかりという枠内で毎年毎年次々と優れた若手を選出することができるのかと危惧していましたが、そんなことはとっくに払拭され、楽しい事業に成長しました。選考委員長の高階秀爾先生をはじめとする歴代選考委員や50名ほどの県内外の推薦委員のご協力は格別なものですし、県単独では到底できない試み、例えば受賞者に対して継続的な助成(各所での個展開催時にカタログ、チラシ、DM作成等々)を行うなど、基金があってこそその取り組みが可能となっています。行政が芸術文化活動に上手に係わることの難さを知る身としては、「I氏賞」は本当に珍しい成功例だと思います。こうした枠組みを構築してくださった伊藤さんご夫妻や関係各位にお礼を申し述べると同時に、「I氏賞」のことをもっと多くもっと広く知っていただくための発信力強化に努めねばならないと考えています。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

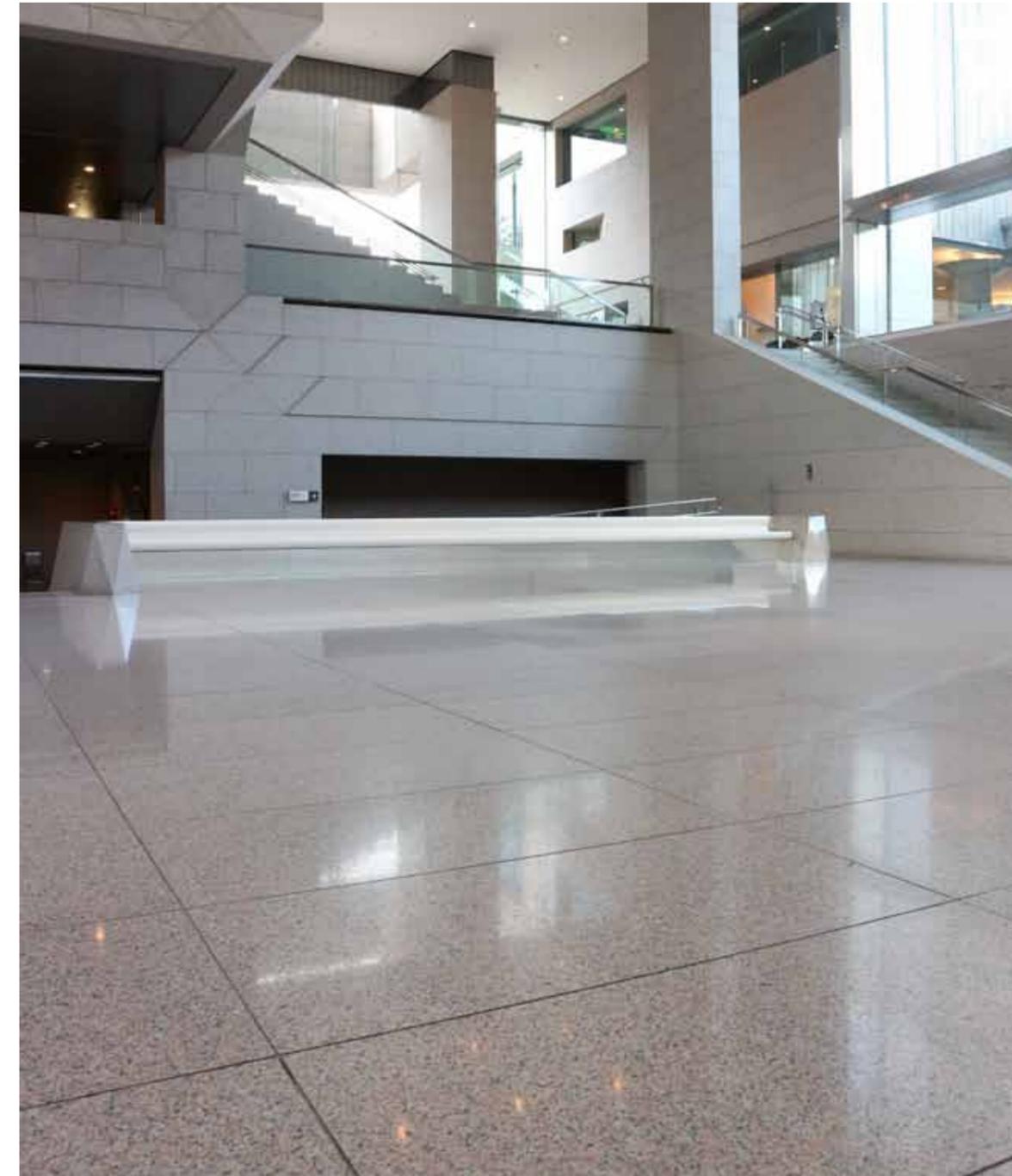
開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)/年末年始/展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース119号をお届けします。本誌掲載の「第7回I氏賞受賞作家展 ダイアローグ」は今年度最後の展覧会となりました。当館は1988年3月18日に開館し、来年で30周年を迎えます。12月11日よりメンテナンス休館に入り、外壁工事や内部設備の修繕などを実施しているのですが、その間、我々学芸員は暇に…なんて甘い話にはなりません。新たな収蔵品図録の編纂やデータベースの整理作業など、通常業務ではなかなか進まなかった膨大な作業を進めつつ、2018年4月20日の再オープン後に開催する展覧会へ向けて備えているところです。次号ではその様子を少しご紹介します。



「美術館の紹介」vol.19

展示棟入口付近にある地下へ通じる階段と展示室との間には、外光が空間全体に拡がる屋内広場がある。内部空間でありながら、外部と繋がる要素を持つ半外部空間のつくりで、作品展示やイベントスペースなど、その時々に応じて多様な空間へと変化する。

美術館講座「斎藤真一〈^{こぜ}瞽女シリーズ〉をみる」

岡本 裕子(主任学芸員)

「岡山の美術 第5期」(2017年8月30日-9月24日)では、倉敷市児島味野出身の斎藤真一(1922-1994)が「瞽女」をテーマにした所蔵作品7点をコーナー展示し^{*1}、併せて美術館講座(2017年9月16日)^{*2}を開催した。

盲目の旅芸人である「瞽女」は、最後の瞽女と称された小林ハル(1900-2005)が亡くなったため、視覚障害者が維持してきた瞽女文化は21世紀の日本社会から完全に消滅したといわれる。それ故、現代社会の中では「瞽女」に対する認識が乏しく、「瞽女」の一面だけを切り取ったかのような哀愁と悲劇の文脈で語られることが多い。それは、作品を鑑賞する上でも同様の文脈で語られがちで、弊害となる場合が見受けられる。そこで、本講座では、文化人類学者の視点での「瞽女(文化)」と学芸員の視点での斎藤真一「瞽女シリーズ」、双方向のやりとりから作品をみることを提案したいと考えた。講師には、広瀬浩二郎氏(国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授)、そして妹尾克己氏(元岡山県立美術館学芸課長)のお二人を招聘した。

広瀬氏には、多数派(健全者／見常者^{けんじょうしゃ}*3)の論理で形成された「瞽女」のイメージを払拭してほしい旨を伝えた。広瀬氏は、哀愁と悲劇の文脈の範疇を超えた「瞽女(文化)」を、視覚優位の世界で現代を生きる参加者が、体感する(触る)ことが出来るよう『瞽女さんの唄が聞こえる』(DVD)^{*4}、そして『瞽女唄Ⅱ 高田瞽女篇』(CD)^{*5}を視聴する形で話しを構成された。瞽女唄は、三味線の撥を手に持って音を奏で、師匠から弟子へ、盲女の手から手へと継承されたという。実際、瞽女唄の野太くはりがある抑揚に富んだ声色は、耳で聞く(聴覚)というより、体に「響く」(触覚)という感じがした。また、瞽女は旅によって「見えない世界」と出会い(例えば、風を肌で感じることで緑が見えるような気がする)、その感触を豊かな想像力と創造力で唄に変換していたという。瞽女が生きる術として身につける瞽女唄の修行を「音にさわる」、見えない世界を触覚で感じながら歩いた瞽女の旅を「色にさわる」と広瀬氏は表現する。そして、「音にさわる」「色にさわる」というエッセンスに要約される瞽女唄が起爆剤となり、聞き手である見常者も「音にさわる」「色にさわる」ダイナミズムを共有(盲人と見常者の対等な交流)していたという。この対等な交流、双方向のコミュニケーションを「瞽女文化」と定義している。

妹尾氏には、学芸員として作品を収集・調査／研究する中でみえてきた画家と作品について、あわせて個人的・主観的な見解も含めて話しをしてほしい旨を伝えた。妹尾氏は、斎藤真一の画業を辿る形で話しを構成された。斎藤においては、絵を描くということは生きることと深く結びついているという。斎藤は、外から瞽女を見るのではなく内に入り込み(斎藤自身「私は敢えて瞽女さんの中に飛び込んだ」と記述している)、10年の長きに亘り越後通いし瞽女宿を巡る中で、多くの瞽女の生涯を発掘すること



左より:斎藤真一《瞽女旅姿》1980年 本館蔵 / 瞽女の旅姿写真(提供:広瀬浩二郎)

となる。6歳の時、はしかで失明した瞽女の「目の見えていた幼いころの一番はっきりした記憶は、越後の平野に沈んでいく真っ赤な太陽でした。大きなお日様がとてもきれいで、まぶたの中に今も焼き付いています」という色に対する記憶は、瞽女シリーズの特徴的な色『^{あか}赫』になっていると妹尾氏は強調する。「同じ赤でも目で見える外見上のいきづまった色では決してなく、実に鮮やかで純度の高い、むしろこの世ではもう見ることのできない透明度のある『赫』、そしてその『赫』は得体のしれない生き物のようなねっとりとした魂の色にも思えた。瞽女さんの命が凝縮したもの、瞽女さんの分身そのもの」と斎藤自身も語っている。瞽女シリーズの制作に取り組んだ1960年代から1970年代は、経済的豊かさの追求のかたわらで、何かかが失われてゆく、かけがえのないものが消えてゆく時代であった。そういう時代にあって、斎藤は、瞽女たちの姿、振舞、義理人情などすべてから、かつての日本人の原点を見いだし、瞽女シリーズを描いたと妹尾氏はしめくくった。

文化人類学者の視点での「瞽女(文化)」と学芸員の視点での斎藤真一「瞽女シリーズ」、双方向のやりとりを通して、作品をみることを提案された講座参加者の感想を紹介する。

一度に7点見る機会はなかなかないとのことだったので、よい機会に恵まれてラッキーでした。鮮やかな「赫」とブルーグレーの世界でした。魂の色、命の色、血の色でもあるけど、人間のあたたかみも女性としてのかわいらしさもあるのではないかと感じました。実際に瞽女さんの生活をみてからの鑑賞だったので背景がよりわかって理解が深まったように思います。描く人／描かれる人／鑑賞する人、それぞれの立場での視点を持つことがとても大切だと思いました。ステレオタイプな見方、画一化した視点にとらわれがちになりそうですが、「上から目線」ではない様々な視点を持つよう心がけたいです。それはどの作品をみる時とても大切なことだと思いました。

感想からは、多数派(健全者／見常者)が、無意識に、あるいは無自覚に形成している“常識”という概念の落とし穴に気づき、“常識”を点検しながら、作品そのものと対峙しようとする姿がうかがえる。そして、そのことを通して参加者(鑑賞者)は「作品が持つ本質や可能性」を体感したこともうかがえる。

講座を終えて印象的だったことは、両氏に双方の話しを受けての感想を求めた際、「異文化理解」、「20世紀美術におけるプリミティヴィズム展」^{*6}が、共通の話題としてあがったことである。掘り下げて伺う時間がなかったことが悔やまれる。次回、是非テーマにしたい。

※1 《瞽女旅姿》(1980)、《梅雨の頃(髪洗い)》(1970)、《おいとの帰郷》(1964)、《風の日》(1975)、《雪舞う》(1980)、《にわか雨》(1974)、《明星》(1980)

※2 美術館のアクセシビリティを高める「美術館講座 斎藤真一〈瞽女シリーズ〉をみる(「瞽女の手-視覚障害の「さわる文化」と現代)広瀬浩二郎氏、「画家と作品、時代背景、それから私の個人的な体験」妹尾克己氏)／手話通訳・要約筆記付き。画像等使用する場合は「言語による補足説明」に留意。

※3 見ることを常とする人(cf.触常者:触ることを常とする人)

※4 DVD『瞽女さんの唄が聞こえる』(有限会社地球村)

※5 CD『瞽女うたⅡ 高田瞽女篇』(オフノート)

※6 1984年9月27日-1985年1月15日に、ニューヨーク近代美術館で開催された展覧会

【参考文献】

『手の百科事典』(朝倉書店)、『斎藤真一 さすらい記-なつかしき故里をもとめて-』(有限会社 朱雀院)、『越後瞽女日記 斎藤真一』(河出書房新社)

終わらない対話

古川 文子(学芸員)

このたび当館では、岡山県新進美術家育成「I氏賞」の第7回(2013年度)・第8回(2014年度)大賞受賞者、高松明日香と原彰子による展覧会「ダイアログ dialogue」を開催しました。(2017年11月10日-12月10日)

香川県出身の高松明日香さんは、現在も高松市を拠点にアクリル絵具による絵画の制作を続けています。倉敷芸術科学大学での勤務を契機に岡山県内でも度々作品を発表、今年では東京での個展(「届かない場所」三鷹市美術ギャラリー)も話題となり、ますます活躍の場を広げています。インターネット上の画像、映画や舞台のワンシーン、身近な風景など、様々な題材の中から切り取られたイメージは、彼女のフィルターを通して、青みがかった色調と筆あとが印象的な画面に定着され、まだ見ぬ物語を想像させます。

岡山県玉野市出身の原彰子さんは、10歳で家族とともにドイツに移住し、メディアデザインの手法を学びました。絵画的な造形性の高いグラフィックデザインにより、「I氏賞」大賞を受賞しています。本展では、多彩な展開を見せる映像作品5点と、その制作過程を伝える画像、代表作『Abita』の墨で描いた原画等の制作資料を、ご覧いただきました。会期中のアーティストトークでは、作品ごとに異なる色調や描法に取り組む原さんの意欲と技術力を高松さんが称賛し、高松さんの描いた風景に原さんが故郷の記憶を呼び覚まされたと語る場面も見られました。

ふたりの作品が並ぶ会場では時おり、一度見ただけではわからない、言葉で説明するのが難しい、といった声を耳にしました。そこにこそ、美術作品の魅力があるのではないのでしょうか? 11月17日に開催した「I氏賞」10周年記念行事(館長コラム参照)で、選考委員長の高階秀爾氏、基金原資寄附者の伊藤謙介氏らによる座談会のあと、会場から「どうすれば、受賞できますか?」との質問が投げかけられました。そこで、第1回大賞受賞者の大西伸明さんは「すぐに何かはわからないもの、既成概念で簡単に説明のつかないような作品を創ること」の大切さをご自身の経験を踏まえて示されていました。咄嗟のお答えの中にも、受賞者の皆さんに通じる制作姿勢がうかがわれ、心に残る一場面でした。

年明け1月30日からは、第11回「I氏賞」の一次選考を通過した11名の作品が、岡山県天神山文化プラザに集まります。候補者たちの新鮮な表現を前に、美術作品との終わりのない対話を楽しんでいただけましたら幸いです。



1



2



3



4

1-2. 高松明日香展示風景
3. 原彰子展示風景 / 4. 『Abita』制作資料(絵コンテ、背景画、動画など)

良寛展後記と新収蔵品《良寛書》

中村 麻里子(学芸課長)

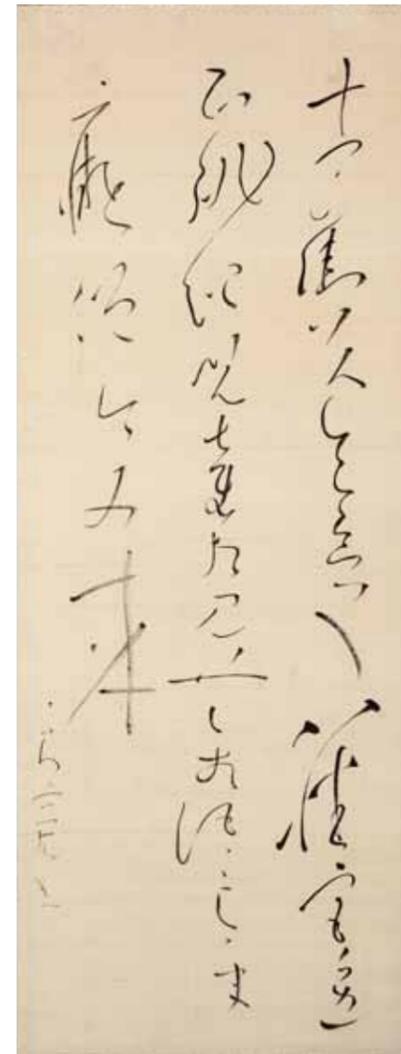
万葉洞・関谷徳衛氏が生涯をかけて収集した良寛作品とゆかりの品々あわせて153点を紹介する特別展「慈愛の人 良寛—その生涯と書」が、11月5日に会期を終えた。22歳の時に国仙和尚に従って倉敷市玉島円通寺に来た良寛は、10数年をそこで過ごしている。ゆかりの地である岡山では熱心なファンが多く、円通寺では毎年5月初旬に「良寛茶会」が開催されるなど、広く親しまれている。今回の良寛展は、所蔵者関谷氏と良寛研究の第一人者で全国良寛会副会長の小島正芳氏に全面的にご協力を得て開くことができた。連日熱心なファンが来館し、その滞在時間の長さが際立っていた。

良寛展に関連して、地下展示室「岡山の美術」会場に、ささやかではあるが当館収蔵の良寛作品も展示した。本館蔵の6曲1双屏風、高木聖雨氏寄贈品の良寛書1幅、文化勲章受章者・高木聖鶴氏が良寛の漢詩・和歌を書いた作品2面、などである。また良寛を慕った陶芸家で研究者でもある小山富士夫も実は玉島出身であり、あわせて小山の陶や書を約20点紹介した。

ところで高木聖雨氏より寄贈いただいたご父君の遺愛品4点のうち、1点が良寛書である。「十字街頭乞食了 八幡宮辺正徘徊 兒童相見共相語 去年癡僧今又来」という良寛が繰り返し書いたお気に入りの漢詩である。

街の四つ辻で托鉢をし終わって、八幡宮のあたり^{※1}をぶらついていたら、子どもたちが見つけて言い交すには「それ、去年の馬鹿坊さんがまたやってきた」^{※2}という内容である。良寛が托鉢をして回っていると、いつも3~4人の子どもたちが集まり手毬をせがんだという。「癡僧」と自嘲的な言葉を使いながらも、「兒童相見共相語(じどうあいみでともにあいかたる)」と、子どもたちとの心の交流を生き生きと語っている。良寛は自作の詩や和歌を全て記憶し、何も見ないで白い紙に向かって筆を揮ったらしい。そのため1字2字違っていたり、抜けていたりすることはしばしばで、それは意図的にしたものであろうという説がある。

「書は読めなくても意味がわからなくても大丈夫。点や線の動きや空白とのバランスなど構成を視覚的に楽しむことができる」と九州国立博物館館長・島谷弘之氏が言われていたのを聞いたことがある。しかし読めて意味もわかれば、ぐっと作品に近づけるのも事実。今回は全作品に短い解説と釈文あるいは訳文を付けたので、ある程度は書き手の気持ちに寄り添いながら見ることができたのではないかと思う。今回の展覧会開催によって、門外漢の私でも、良寛の書とそこに込められた精神に触れることができたような気がする。



良寛《十字街頭乞食了》本館蔵(高木聖雨氏寄贈)

※1 小島正芳氏によると、八幡宮とは三条(現新潟県三条市八幡町)の三条八幡宮であろうとのこと。

※2 『東洋文庫757「良寛詩集」入矢義高 訳注』294-5頁の訳を参考にした。同書が取り上げた漢詩では、「八幡宮辺」ではなく「八幡宮西」であるので、訳も「八幡宮の西」としている。

新収蔵品紹介

File 10

赤松麟作《にわとり》
廣瀬 就久(主任学芸員)



1.《にわとり》1916年 本館蔵

11月10日から12月10日まで開催した「岡山の美術 第7期」では、2016年度に所蔵された作品を中心に展示しました。

《にわとり》(図1)は、住宅の玄関に長期間掛けられていた作品で、キャンバスの張りが緩んでいました。画面に補彩があり、その後にワニスが厚く塗られ、ワニスの塗布むらと変色が生じていました。今年度の修復では、キャンバスを整形して、劣化したワニスと旧補彩を除去し、そして新しく補彩して、天然樹脂ワニスを塗布しました。

修復を終えると、にわとりと花は白色に戻りました。花はムクゲです。地面の色は、光を受けて桃色に輝いています。左下の年記は、修復前には読めませんでしたが、1916年と読めます。作品を修復して、画面本来の姿が蘇るのは、大変すばらしいことです。

鳥を描く当館所蔵品を見ると、《雀の群》(図2)では、松の木に多くの雀が集っています。植物を描く当館所蔵品では、《睡蓮》(制作年不詳)、藤を描いた《奈良の鹿》(1944年)などがあり、生けた花を描く当館所蔵品では《薔薇》(1938年)、《鬼ゆり》(制作年不詳)などがあります。赤松の画業を見ると、瓶花図を除いて静物画が少ないです。

構図を見ると、《にわとり》も《雀の群》も、西洋絵画というよりは、東洋絵画の花鳥画を意識しているように思います。《雀の群》の松葉を、日本美術の筆遣いで描いているのかと推測します。戦前の《麟作画集》(本人編集発行、1939年)には、花卉や鳥獣を描いた自作の日本画を多く収録しています。赤松は日本美術のどのような部分に関心をもっていたのか、興味深いです。



2.《雀の群》1930年 本館蔵

展覧会スケジュール

12月
December

11月10日|金|—12月10日|日|

【岡山の美術展】 第7回I氏賞受賞作家展 ダイアローグ 高松明日香・原彰子

岡山県新進美術家育成「I氏賞」の第7回(2013年度)・第8回(同2014年度)「大賞」受賞作家による展覧会。日常生活の中でふと気になりつつも忘れてしまうような記憶の一場面を描き留めたような絵画で、独特の世界観を醸し出す高松明日香、現代社会を鋭い感性で認識し、墨絵やアクリル絵具などアナログ技法と2D・3Dデジタル技術を掛け合わせたアニメーション作品を発信する原彰子、二人の作品と受賞後の活動をご紹介します。

1月
January

12月11日|月|—2018年4月19日|木|

※メンテナンス休館

岡山県立美術館は、施設等のメンテナンス改修のため、2017年12月11日から2018年4月19日まで休館いたします。

皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご了承いただきますようお願い申し上げます。改修終了後のオープンには、開館30周年の特別展を企画しています。

詳細は当館webサイトなどでお知らせいたしますので、どうぞご期待ください。

2月
February

3月
March